

悲しむ人々に与えられる神の慰め

マタイ福音書 5 : 1 - 12



司祭 ヨハネ 井田 泉

2023年1月29日

顕現後第4主日

京都聖三一教会にて

「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。」

マタイ 5:4

今日はこの言葉に耳を傾けたいと思います。

山の上でイエスは、おびただしい人々が自分に従って来ているのをご覧になりました。悲しむ人、打ちひしがれた人、貧しい人、辛い現実には耐えている人々です。それでも神を求めて、正しく生きたいと願っている人々がいます。

人々の悲しみに触れたとき、イエスの心は悲しみに満たされました。一時しのぎの慰めを口にするにはできません。しかしこの人々を望みのない悲しみのままで立ち去らせることはできない。ここでイエスの心は呻^{うめ}いて、この悲しむ人々に対して神は何と云ってくださるのかを、イエスは祈り求められました。

やがてイエスの心と口から言葉が響き始めました。

「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。」

神の慰めが、イエスの心と言葉をとおして、悲しむ人々の心を包み込みました。イエスの祈りをとおして人々の悲しみは神に届き、神の慰めはイエスの言葉をとおして人々を包み込みました。

ところで今から 78 年前、ひとりの韓国・朝鮮の青年が福岡の

刑務所に捕らえられていました。名前は尹東柱^{ユンドンジュ}といます。日本が朝鮮を植民地支配していた時代の末期、尹東柱^{ピョングン}は平壤、ソウルで学んだ後、日本留学を志し、はじめ立教大学に学び、ついで京都の同志社大学英文科に学びました。夏休みになり、故郷に帰省しようとして荷物を送った後に、下宿にいるところを下鴨署の特高に逮捕され、裁判にかけられました。判決は2年の懲役。罪状は独立思想を宣伝した、ということでした。しかし彼は特別に独立運動をやったわけではありません。彼はただ、失われていく、奪われていく朝鮮の言葉や文化を大切にしなければならないと友人たちと語り合い、また自分の言葉で詩や日記を書いただけなのです。それが治安維持法違反とされました。

78年前、尹東柱は福岡の刑務所で最後の冬を過ごし、衰弱の果て、1945年2月16日に獄死しました。満27歳でした。

彼は真実なクリスチャンで、信仰に関わる詩をいくつか残しています。

なぜ今日彼のことを話したかというと、彼が「悲しむ人々は、幸いである」というイエスの言葉を、自分の詩に歌っているからです。

それは「八福」팔복 (パルボツ) という詩です。23歳の時のものです。これは今日のマタイによる福音書第5章、イエスが「心の貧しい人々は、幸い」から始まる八つの幸いを語られた

ものを元にしたものです。イエスはこう言われました。

「心の貧しい人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は、幸いである、

その人たちは慰められる。

柔和な人々は、幸いである、

その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人々は、幸いである、

その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は、幸いである、

その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人々は、幸いである、

その人たちは神を見る。

平和を実現する人々は、幸いである、

その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。」 マタイ 5:3-10

「幸い」が8回繰り返されています。それで「八福」なのですが、尹東柱はこれを全部二つ目の幸い、「悲しむ人々は、幸いである」にしてしまいました。八つをすべて「悲しむ者」に置き

換えたのです。読んでみましょう。

八福 「マタイ福音 5章 3-12」という副題が付いています。

슬퍼하는 자는 복이 있나니	悲しむ者は幸いである
슬퍼하는 자는 복이 있나니	悲しむ者は幸いである
슬퍼하는 자는 복이 있나니	悲しむ者は幸いである
슬퍼하는 자는 복이 있나니	悲しむ者は幸いである
슬퍼하는 자는 복이 있나니	悲しむ者は幸いである
슬퍼하는 자는 복이 있나니	悲しむ者は幸いである
슬퍼하는 자는 복이 있나니	悲しむ者は幸いである
슬퍼하는 자는 복이 있나니	悲しむ者は幸いである

「悲しむ者は幸いである」が 8 回繰り返されます。「心の貧しい人々」「悲しむ人々」「柔和な人々」「義に飢え渴く人々」「憐れみ深い人々」「心の清い人々」「平和を実現する人々」「義のために迫害される人々」——これらイエスに幸いを呼びかけられた人々をすべて、「悲しむ人々」に代表させた。言い換えると、「心の貧しい人々」「柔和な人々」「義に飢え渴く人々」「憐れみ深い人々」「心の清い人々」「平和を実現する人々」「義のために迫害される人々」——これらの人々は皆、悲しみの人である。尹東柱はそうはっきりと感じたのでしょう。

そして「八福」の最後は

저희가 영원히 슬플 것이요. わたしたちは永遠に悲しむだろう。

何という悲しいことでしょう。わたしたちは幸いを受けつつも永遠に悲しむ、というのです。けれどもこれはこういうことではないでしょうか。——もしこの世界に悲しむ人が一人でもいるなら、その一人のために自分も悲しむ。この世界に悲しみが終わらない限りは、自分の悲しみも終わらない。

これはイエスさまの思いではないでしょうか。最後の一人の悲しみが終るまで、イエスは一緒に悲しんでくださる。尹東柱はイエスの思いを感じていた気がします。

イエスは悲しみを知っておられました。ベタニアのラザロが死んだとき、イエスはその墓で泣かれました。「**イエスは涙を流された**」(ヨハネ 11:35)と書いてあります。“Jesus wept.”

またイエスのご自身が捕らえられる直前、ゲツセマネの園で祈られたとき、こう言われました。

「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。」 マタイ 26:38

イエスは悲しみを知っておられました。しかし同時に、イエスは悲しむ人を悲しみのままに放置されません。

「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。」

何によって、だれによって慰められるのでしょうか。神によ

ってです。だれも与えることのできない慰めを、神が与えてくださる。神の慰めに包まれる幸い、祝福がある。その慰めをイエスがもたらしてくださるのです。

深い悲しみは安易な慰めを許しません。しかし人の悲しみを知っておられ、またみずから悲しみを極みまで経験されたこのイエスは、わたしたちを慰めることができるし、また事実慰めてくださるのです。

「その人たちは慰められる。」

慰めを必要としている人に、神さまが慰めを与えてくださいますように。主イエスが、人の悲しみを共に悲しみつつ、神の慰めに生かされる幸い、祝福をもたらしてくださいますように。